

『花蜜と蝶の戯れ ～崎谷はるひ作品集～』

著：崎谷はるひ

ill：冬乃郁也

柳島千晶は、毎度見慣れた扉のまえで、大きくため息をついていた。

目のまえにあるのは、ホストクラブ『バタフライ・キス』新宿本店の、従業員出入口。そして呼びだしをかけた本人は、この城の王様である柴主将嗣——源氏名、王将。

そして現在フリーのWEBデザイナー兼SEである千晶の、もっとも大口の契約相手だ。しかしながら、ここを訪れた千晶はふだん、取引先に向かうときのようにスーツ姿ではない。なぜかといえば、無茶な納期で突っこまれた仕事を、これも無茶な進行で仕上げたのがこの日の午後。数日まえから突貫工事で作業して、ほとんど寝ていない状態で完成したデータをメールしたところ『プリントアウトして持ってこい』とのお達しがあったのだ。

(ほんつとに、こっちの都合考えないよな)

そもそも同居している状態なのだ。帰ってからも充分見る時間はあるだろうし、添付ファイルを自分のパソコンで見ればいいだけの話なのに、直接説明しろと将嗣は言い張る。

じつのところ、あの男はデジタルアレルギーの節が強いのだ。それと、極端なまでに自分が興味のないことについて、面倒くさがる。

メールくらい見ろってのに。げんなりしながら、入り口付近のインターフォンを押した。

『どちらさまっすかあ』

「柳島です。オーナーに呼ばれて……」

『あ、どーぞお』

応答したのは若く不慣れな声で、おそらく入ったばかりの従業員だろう。言葉遣いもかなりグダグダだ。なるほどこれは、寮に入れて礼儀作法を教えなければならぬわけだ、と千晶は内心苦笑した。

ロックが解除されたドアから、慣れた通路をオーナールームへと進む。途中すれ違ったキャストたちの一部には顔も知られていて「おはようございます」と——ちなみに現在、店は一部営業中、つまり時刻は夜だ——挨拶をされながら、千晶も会釈を返した。

「お？ 千晶さん、こんばんは」

「ああ、こんばんは」

まともな挨拶をしてきたのは、このホストクラブでルークと呼ばれるナンバー2の勇氣だ。千晶は自分があまり愛想のないタイプだと知っているし、おかげであまりひとに好かれにくいのだが、勇氣は顔をあわせるといつも朗らかに相手をしてくれるので、かまえずに話すことができるめずらしい相手だった。

「休憩中？」

メインキャストである彼が、営業時間中に裏口にいるなどめずらしい。千晶が首をかしげると、彼は手にした千円札をひらひらと振ってみせた。

「お客さんが、煙草買ってきてほしいって」

「そんなのヘルプの仕事じゃないのか？」

「飲み勝負で負けて、罰ゲームなんですよ」

「……ホストも大変だな」

下っ端の仕事もにっこり笑ってこなす、勇気の気配り具合には感心する。つられて笑っていると、背後から低い声が名を呼んだ。

「千晶。油売ってねえで、さっさと来い」

はっと振り向くと、将嗣がオーナールームの扉のまえで、腕を組んでいる。あわてて将嗣のもとへと足早に向かいつつ、勇気に「それじゃあ」と告げると、彼は笑って「お疲れさんです」と手を振った。

「おせえよ、来いっついたらさっさと来い」

オーナールームのドアを閉めるなり、横柄な口調で言われて千晶は眉根を寄せた。

「遅いもなにも、言われてすぐ、家出たよ」

クライアントに取る態度ではないと知ってはいるけれど、いまさら将嗣を相手に敬語を使うのも妙で、千晶はつっけんどんに手にした書類を突きだした。

「……これ、企画書と、WEB部門に誘おうと思ってる面子の報告書」

今回頼まれたのは、今後『バタフライ・キス』グループ内に作ろうとしているWEB専門の管理会社の事業スキームで、WEBデザインのテンプレートや出納管理のソフトなどを提案しろ、というものだった。

いま現在、ビジネスインフォメーションにもっとも有効なのは、やはりWEB展開だというわけで、かつては通販会社の社員をやりながら片手間にサイト作成を請け負っていた千晶におはちがまわってきた。

というか、単純に千晶ひとりでは手に負えない仕事量になったため、どうでも専任の部門を作らざるを得なくなったのだ。

その会社のチーフを任される件について、千晶は当初かなり渋った。将嗣とは十二年にわたる根本的な気持ちの掛け違いを経て、本当につい最近、自分が愛人ではなく恋人らしいと認識したばかりだ。

ひところのように、「愛人に仕事を恵んでくれるわけか」などとひねくれたことは、さすがに考えなくなった。というより、将嗣本人にきっぱりと、宣言されてしまっている。

——いくら『愛人』だからって、仕事のできないやつに任せるほど、ばかじゃねえよ。

下半身のだらしなさを軽蔑しつつも、あの男のカリスマ性だけは否定できなかった。だからこそ、ただのセックスの相手としてではなく、自分を認めてほしいと願い続けた千晶には、てきめんに効いた台詞だった。

それは素直に嬉しく、たくさんのことを自分の斜めに歪んだ視線で見落としていたのだと、いまはわかる。だが——正直に言って、千晶はこのところ、将嗣を相手にどう振る舞えばいいのかわからなくなっていた。

というより、ふたりきりになったとき、恋人の顔をすればいいのか、仕事の顔をすればいいのか、それすらわからず頭が真っ白になるという有り様で、だからこそ、店に呼び出されるのが億劫だった。

ふたりの関係を知る檜山春重には「いまさら純愛ぶって、キモい」とからかわれたりもするのだが、どうにもバイオリズムがコントロールできないのだ。

（いや、仕事だ。仕事の報告だ）

ちいさく咳払いして、千晶は自分用にまとめてきた資料に目を落とした。

「ええと、メールに添付したPDFと同じ内容だけど、まずはソフト関係であたりつけてるの——」

言葉が途切れたのは、背後から腰を抱かれたからだ。ぴくりと眉を動かし、睨みつけようとしたところで、オーナーデスクへと追いつめられる。極力無視したまま、千晶はひたすら報告書に集中しようとした。

「——競合二社のソフトで、ランニングのコストパフォーマンスを比較しっ……」

だが、首筋に唇を這わされては、それもうまくできない。

「ちょっと……」

「ん？」

将嗣が、こめかみにキスを落としてくる。ぞくりとして身をよじるなり、正面から抱き直され、シャツをめくりあげられ、肌を撫でまわされた。

「俺、報告書持ってこいって言われたから、来たんだけど」

やめろと睨みつけながら言ったのに、「ああ」と生返事をするばかりだ。

「ていうかメールしたのに、なんで見ない……っ、どこ触ってんだ！」

ばしばしと書類の入ったファイルで将嗣を叩くけれど、その合間にもあちこち触られ、キスを落とされ、すこしも効いた様子がない。

「あの、まじめに、話」

たしなめる声を「ああ」とまた適当に流した男は、ついに胸のさきまでつまみ、本格的にいじりはじめた。さすがにぎょっとした千晶は、冗談がすぎると目をつりあげる。

「……っ、将嗣、いいかげんにっ……」

怒鳴りつけようと顔をあげ、うっかり間近にある将嗣の顔と目があってしまった。そこには、かつてのような嘲笑まじりのからかいや、ただ卑猥なだけの嗤いはない。

真っ黒な目に、吸いこまれそうで怖くなる。目を逸らそうにもできず、ぼうっと見惚れてしまった千晶は、気づけばやわらかくあまいキスを受けいれていた。

「し、仕事じゃないなら、帰る……」

「こんなでか？」

長い口づけの合間、すっかり兆したものを長い脚でこすりあげられた。びくっと震えた千晶は、自分がいつの間にか彼の首筋に腕をまわしていたことに気づく。

「か、帰ってからでいいだろ、こんな……」

「そしたらおまえ、寝るだろ。あしたの昼までは確実に起きてこねえだろうし」

「それが目的かよ！ 報告は！」

「あとで書類読んでおきゃいいんだろ」

だったらメールで事足りたじゃないか、という言葉は、また強引なキスに呑みこまれた。寝不足で疲れて、ぼうっとしていた頭がさらにかすんでいくような濃厚な口づけは、千晶の理性をぼろぼろに溶かしていく。

「おまえがこの三日、ひとりで寝かせるから悪い。家にいる間中、パソコンいじってやがって。仕事終わったってんなら、やったっていいんだろ」

いかにも不満そうに言われ、かっとな顔が熱くなった。もともと生活時間がずれている将嗣とは、ベッドをともにするどころかろくに顔もあわせないままでいたけれど、それもこれも、突然の突っこみ仕事を持ちこんだ男のせいなのだ。責められる筋合いはないと思う。

「将嗣が急いで仕事しろって、言っ……あっ」

口答えは許さないというように、股間をボトムスのうえからぎゅっと掴まれ揉みたてられる。じんと快楽が背筋を這いのぼり、千晶は目のまえの男にすぎるように掴まった。

「そんなに、したいのかよ。たった三日だろ」

以前、まだいろいろとすれ違っていたときは、数カ月顔を見ないことすらあった。なのに、遅まきながらお互いに告白らしきことをしたあとから、将嗣は千晶を求めるだけ求めてくる。

「おまえはどうなんだ？ ちょっといじっただけで、こんな、ぱんぱんにしてんじゃねえかよ」

「つ、疲れてるし……っ。帰って、寝たい」

「気持ちよく寝られるようにしてやる」

そういうことじゃなく、と口ごもるのに、すでにボトムスのなかに入りこんだ悪い手が、千晶の思考をどろどろに溶かしていく。

(うわ、うわ、やばい……)

絶妙な指遣いに、腰が揺れてしかたない。

かつて本人にも言ったことはあるけれど、将嗣のセックスはよすぎる。それに惑わされ、まともにつきあう覚悟もないまま関係に引きずりこまれて、ずるずるになった事実はいまだに千晶の胸に苦い。

けれど、最近の彼を拒めないのは――。

「……いやか？」

そっと声をやわらげて、目を覗きこんでくる。まるで千晶の機嫌を窺うかのような態度に、胸が苦しくなった。

(ああくそ、もう、これだからっ)

十二年、いつでもうえから押しつけるように支配してきた男が、選択権を千晶にそっと渡して

くる瞬間、胸がぎゅわっと引きしぼられるのだ。そして、こうして意向を聞いてさえもらえれば、あつけなく落ちる自分がある。

「で、デスクするのは、やだ……」

いつぞやか、なぶるように抱かれた記憶の濃いその場所でだけはいやだった。ぼそぼそと訴えると、将嗣はにやりと笑う。

「ソファなら？」

含み笑って問われ、千晶は真っ赤になってうなずいた。

「で、でも、最後まで……」

「わかった」

ぐずる千晶に怒りもせず、くつくつと喉を鳴らして将嗣が耳朶をいじってくる。

——できればもうちょっと、恋人みたいに、やさしくしてくれたら、嬉しいけど。

きっと叶えられないだろうと思い、皮肉な冗談として放った言葉を、おそらく将嗣なりに実行しようとしているのがわかるから、あまいせつなさに負けて、逆らえなくなる。

(同じことなのに)

強引に、場所も時間もわきまえず奪われる、そのこと自体は変わっていない。なのに、触れる手が、唇が、以前よりずっとやさしい気がするから、長いこと情に飢えきっていた心と身体が将嗣に向かって伸べられる。

ソファに横たわらされ、服を脱がされた。脚を開かされると、もうすっかりその気になっている自分自身が目に入り、千晶は目をつぶって顔を逸らす。

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<https://www.fwinc.jp/daria/>